

間の楔 まのくわ

吉原理恵子

原理恵子

の

楔

くせび



間の楔あいのくさび

一九九〇年九月三十日 印刷
一九九〇年十月五日 発行

著者 吉 原 理 恵 子

発行者 深 見 兵 吉

発行所 光 風 社 出 版

東京都文京区関口一三十二四

郵便番号一一二

振替東京八一二九一三

印刷 大 盛 印 刷

製本 越 後 堂 製 本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えします

©Rieko Yoshihara 1990 Printed in Japan

ISBN4-87519-497-8 C0093

間の楔・目次

第Ⅰ章	帰って来た男	STRANGER	7
第Ⅱ章	回 想	FLASH BACK	62
第Ⅲ章	再 会	AGAIN	114
第Ⅳ章	長 い 夜	DARKNESS	168
第Ⅴ章	告 白	SORE HEART	219
第Ⅵ章	傷 痕	SO LONG GOOD-BY	272

装画 道原かつみ

間の楔

第I章 帰つて来た男〈STRANGER〉

あたり一面、闇だった。

だが、不安に駆られて居たたまれなくなるような暗闇ではない。物の輪郭がわかる程度に絞り込まれた暗さだった。

静かだった——

常時、快適に過ごせるようにプログラムされたエア・コンディショナーは、こそともしないが、大気はユラユラと乱れていた。

部屋の中央に据えられたベッドで、シーツのすれる音がする。

右に左に、影は小刻みに揺れ動いていた。

目が冴えて眠れないままに、幾度も寝返りを打っているようにも見えた。
いや、そうではない。

彼は——寝ているのではなく、起き上がれないのだ。

両の手首は、自由がきかぬように頭上でしっかりと固定されていた。伸びきった腕はかすかに震え、自由にならない苛立たしさをかみしめているのか、拳はきつく握りしめたままだ。

しかし、何が何でも自由になってやるんだ、という気概をこめてもがいているようには見えなかった。

あきらめているのか、それとも、単に、もがき疲れただけなのか。その表情までは読み取れない。ただ、ときおり、こらえきれないような低い呻き声もれた。

身体をくの字にねじ曲げ、抗いがたい何かを、必死に歯を食いしばって耐えているような悲痛な響きがあった。もつとも、その声音の底には、聞く者の耳に甘い吐息を吹きかけてくるような、ひどく淫らな色香をにじませていたが……

——ちく……しょう……くそつ、たれ……

せり上がる鼓動の荒さに喉を震わせながら、彼は、口の中で幾度もそう毒づいていた。意地もプライドもかなぐり捨て、恥も外聞もなく泣き出してしまいうひとりの自分を叱咤し、彼は血がにじむほどきつく唇をかみしめた。

射精神経を刺激する薬を打たれて、どのくらい時が過ぎたのか。彼にはもう、時間の観念すらつかめない。

ほんの一〇分前のことのもうでもあり、あれからゆうに一時間は越えたような気さえしてくるのだった。

内股の筋が痛いくらいに張って、爪先がヒクヒクと震える。乱れた吐息は喉の乾きを誘ってやまない。

まして、腰が鈍く痺れるほどに熱いきりたったものは、爆発したがって、血管を食い破らんばかり

りに荒れ狂っているのだった。

いきたくてたまらないっ！

思いっきりぶちまけたくて、気が狂いそうだっ！！

なのに、根元をきつく締めつけるリングに阻まれて、射精できずにいた。

数分後――

部屋のドアがかすかに唸り、右から左へと滑るように開いた。

だが彼は、身体を芯から焦がす狂気にのみ気を取られるあまり、男が入ってきたことにも気がつかなかった。

男が、ゆったりした足取りで近づいてくる。あたかも、毛足の長い絨緞が、男の気配そのものを吸い取ってしまうかのような、優雅でしなやかな身のこなしであった。

無言のまま、男が、ベッドの脇にあるスイツチに軽くふれた。

間髪置かず、部屋は煌々とした光で満たされた。と、彼は一瞬、ハッとまぶしげに目を細め、そこに、秀麗な、だが、ひ弱さも甘さも感じさせない男の怜悧な美貌を認めると、思わず涙ぐんだ。男の顔を目にした瞬間、ぎりぎりまで張りつめていたものが、不意にたわんでしまったかのようなだった。

「どうだ、少しはこたえたか？」

おだやかな、それでいて聞く者全てを威圧せずにはおかない、独特の声の張りがあつた。

「も……か、かんべん、してく……れ、よ……」

涙にむせびながら、彼は哀願した。

それでも、男は眉ひとつ動かさない。

「ほかの奴らとうまくやれとは言ったが、おんな雌の尻に乘れとは言わなかったぞ」

声音のおだやかさとは裏腹の、底冷えのする目つきだった。

「ミメアを娶る雄おとこがいることくらい、知っていたはずだろう？ おまえが、何もかも台無しにしてくれたと、ラウールがかみついてきた。これくらい——当然の罰だろうが」

「——」

「まさか、おまえだって、本気でミメアを取れるなどと思っていたわけではなからう？ だったら、遊びにも、それなりのルールがあつてしかるべきだ。そうではないか？」

そのとき、男の背後から、思いもかけない、女のかん高い声が貫いた。

「遊びじゃないわっ！」

弾かれるように、彼は、ビクンと身を竦めた。

そこに、人目を忍んで逢瀬を重ねたミメアの顔を見出し、呆然と目を見張った。

「おまえに会わせろと言つて、きかないんでな。恋は盲目：とはよく言つたものだ。おまえたちに選ぶ権利はないということが、わからんらしい。だから——おまえの口から、はつきり言つてやるんだな」

何を？——と問い返す彼の双眸が、不安におののいていた。

あるいは、次に吐き出す男の言葉を予期していたのかもしれない。

「本気じゃなかったんだらう？ 相手は別に、ミメアでなくてもよかった。熱い疼きを溶かしてくれ肉褰ももがあれば、誰でもかまわなかった——そうだな？」

一瞬、彼の背をゾクリと這い上がるものがあつた。

決して否とは言わせない——その声音の低さに射竦められて頬が強ばり、彼はぎこちなく目を伏せた。

それが、ふと、ミメアの不安を誘った。

「そんなこと、嘘よね？ 皆でよってたかって、あなたとわたしの仲を裂こうとしてるのよ。ラウルがわたしの相手に選んだの、誰だか知ってる？——ジェナよ。血筋がいいからですって……。わたしは、いやよ！ あんな、顔だけが取り柄の色情^{セックス・ビター}狂なんかっ。あいつに抱かれて子供を産まされるのかと思うと、吐き気がするわっ！ あなたは、ほかの人とは違うわよね？ 好きなのは、わたしだけよね」

だが、想いの丈をこめた言葉の半分も、彼の耳には届いていなかった。間断なく突き上げるものを悟られまいと身を振り^{まは}り、呻き声をかみ殺すだけで精一杯だったのだ。

ミメアは、彼が、自分とのがバレて折檻されているとしか聞かされていなかった。分不相応にも、アカデミー産のバージンに手を出した彼^{あいつ}が悪い——誰もが嘲けるように口をそろえてそう言った。だが、最初に誘ったのは、ミメアの方であつたのだ。自分のせいで彼がひどい目にあっているのだと思うと、もう居ても立つてもいられなかった。

しかし、ほんの数日前まではやさしい目を向けてくれた彼が、今は、顔を背けたきり何の弁解もしようとしなない。ミメアにとつて、それは、何よりも耐えがたいことだった。

彼の沈黙は言葉にならない不安をいだかせ、やがて、それが高じて苛立ちさえ誘った。揺れ動く想いに胸は痛み、たまらず、ミメアはヒステリックに叫んだ。

「どうしてだまつてるの！ なぜ、わたしを見てくれないの！ 何とか言つてよっ!!」

それでも、彼がチラリとも視線を寄こさないと知るや、柳眉を逆立て紅唇をかみしめた。男の言葉に弁解さえしようとしなない彼の背中に、突然、裏切りの醜さを見せつけられたような気がしたのだから。憤怒の果てに言葉も枯れる——そういう目つきだった。

——終わりだな：

男が胸の内ですうつぶやいた刹那、

「卑怯者っ!!」

絶叫に近い罵倒が、ミメアの口を突いた。

彼は背中が焼けつくような気がして、一層きつく唇をかんだ。

そこで必死にかみ殺しているのが喘ぎの音なのか、嗚咽なのか、たぶん彼にもわからなかったに違いない。

そんな彼の背中越し、ミメアはわなわなと唇を震わせると、そのまま、くると背を向けた。

「これで、おまえも懲りただろう？」

足早にミメアがドアの向こうへ吸い込まれていくのを見届けてから、男はゆっくりベッドの端に腰掛けた。

「ま、どのみち、始めからわかりきった結末だったがな……」

平然ときさやきながら、シーツをずらせていく。

雄と呼ぶには、まだ青臭い彼の裸体がそこにある。それでも、荒削りながら均整のとれた肢体は、それゆえにこそ、充分すぎるほどにセクシーでもあった。

男は、じつくりと視線を這わせた。冷たく冴えた双の瞳には、高ぶりも鼓動の乱れもない。ただ、その醒めた視線が、股間に落ちた瞬間にだけ、ピクリとかけた。

猛り狂った彼の雄身が、そこで堅く頭をもたげて絶叫している。

いきたいっ！

いかせてくれっ!! ——と。

「いかせて欲しいか？」

誘いかけるように甘く、男がささやいた。

彼は、幾度も強くうなづいた。

男の手が無造作に膝を割った。

彼は、ひとつ大きく息を呑んだ。これでやっと、この気が狂いそうな責め苦から解放されるのだと思つた。

だが、男の指はそれを嘲笑うかのようにスツと逸れ、谷間の奥の窪みをまさぐつた。

彼は思わず、ギョツと目をむいた。

「わたしの目を盗んで、ミメアとよろしくやっていたんだ。まさか、このまますんなり済むとは思つてやすまいな？」

彼の目に、初めて怯えがかすめ走つた。

男はいつもおだやかであつた。しかし、何があつても声を荒げたことのないこの男が、その仮面の下にどれほど熱く激しいものを秘めているか、彼は誰よりもよく知つていた。

なのに、どうして——と、今更後悔しているのではない。

男にミメアとのがバレたとき、したたかに開き直つてみせたのは彼だつた。

ミメアが好きだつた。華やかな容貌も、純粹培養された育ちの良さからくる世間知らずの高慢さもひつくるめて、本当に好きだつた。彼女は、他の連中みたいに彼を毛嫌いしない、唯一の仲間であつた。

だが、ミメアと会つて語らうその裏で、いつも、男を裏切るスリルにひそかな快感を覚えていたことを、彼は知つていた。

バレたらバレたときのこと——そう高をくくつてさえもいた。

後ろめたさは、男にというより、むしろミメアにより強く感じていたのである。

しかし、今、彼は怯えていた。

「ミメア、とは——一度……だけ、だ……」

下手な言い訳など通る相手ではないと知りながら、そう弁解せずにはいられないほどビクついていた。

「一回が百回でも同じことだ。わたしにとつてはな……。おまえがミメアとやった。それだけで充分だ」

「——」

男は這わせた指でくすぐるように軽く揉んだ。

「おまえは、ここをこうされるのが一番好きだったな」

かすかに、彼が呻いた。

ゆつくりと、だが淫蕩なうねりをきかせて異物がめり込んでくるその感触に、彼は、こらえきれず

に喘ぎの音をもらした。

「どうした。今更、氣どつてみてもはじまるまい？　素直に鳴いてみたらどうだ」

男の声は、寒気を覚えるほどにやさしい。

男の指がそこdegめく度、慢性化しつつあった疼きが一気に収縮し、逆流してより強烈な痺れを

誘った。

彼は、無意識にアヌスを引き締めた。体内の異物を拒絶するのではなく、更に深く誘いこむように

きつく締めつけ、小刻みに腰を振った。

「そう、いい子だ……」